「あまみエフエム　ディ！ウェイヴ」放送原稿〈６月１４日（金）放送分〉

テーマ「奄美先人の知恵」

あまみエフエム　ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は，毎月第２週に，奄美の文化・暮らしにおける先人の工夫などを紹介する「奄美先人の知恵」の３回目です。

今回は，奄美市住用町青久（あおく）の石垣防波壁について紹介します。

青久集落は，住用の最も南の集落です。１９４５年（昭和２０年）には，２３件の家があり，７２名の人々が暮らしていました。太平洋に面しており，浜がお椀の形になっているので，強い南風が吹くと，とても大きな高潮が集落の中心の民家の庭先まで来て，毎年，農作物が被害を受け，集落の人々は大変困っていました。そこで，高潮対策として，農作地のすぐ前の浜にアダンを何度も植林しましたが，高潮に流されてしまいました。

１９４８年（昭和２３年）頃のことです。そのころ，奄美群島はアメリカ合衆国を中心とした連合国の統治下にあり，シマンチュは琉球政府と呼んでいました。青久集落の長年の悩みを解決しようと，当時の区長さんが，高潮に対する防波壁・防波堤を築くよう住用村長に願い出ることを，集落の会合で提案しました。そして，手こぎ舟を太平洋へこぎ出し，市崎（いちざき）を回って住用湾に入り，マングローブの群生を抜けて西仲間の役場まで半日かけて出かけ，村長に，青久の現状と防波壁の必要性を強く語りました。数日後，自ら現地視察をし，実情を理解した村長は，直ちに琉球政府に申し出ました。こうして，政府直轄の事業として，防波壁づくりに取りかかることになりました。

１９５０年（昭和２５年）になり，いよいよ防波壁づくりが始まりました。工事は第１期から第６期まで６年間にわたって行われ，１９５３年（昭和２８年）の奄美日本復帰をはさんで，日本政府の直轄事業として引き継がれ，昭和３０年に完成しました。

琉球政府や日本政府の直轄事業といっても，現在のようにブルドーザーやパワーショベルなどの機械もなく，すべてが人の力で行われました。さらに，工事作業員も遠くからは通えないので，青久に住み込みながら作業にあたり，集落の人々も協力をして作業を進めました。

作業は，まず山に自生するかずらでかごを編むことから始まりました。そして，一本のかずらの両端をかごに取り付け，担（かつ）ぎ棒で担げるようにしました。大きい石は，このかごに乗せて，二人一組で運び，小石や砂は板で箱を作って運びました。それから，大きい石を防波壁の中心に置き，その周りに小さい石を積んで，表面の石と石の間にセメントを詰めていきました。工事の途中にも高潮や台風が来て，せっかく積んだ石組が崩れてやり直すこともありました。

１９５４年（昭和２９年）の第５期工事は，青久と市集落の人々によって行われました。第一期から工事に参加している人々は，工事の手順も慣れており，自分の集落の安全のために，時間や労力を惜しむこともなく，みんなが手を取り合って作業にあたりました。そして，ついに１９５５年（昭和３０年）３月に，青久の石垣防波壁が完成しました。

第１期から第６期までの工事にかかわった人は延べ８１８０名で，専門的な作業員の他は，青久と市の集落の人々でした。みんなが，自分たちの生活を守るために懸命に作業に取り組みました。また，作業員としてやとわれていない人々も，自分たちのこととして積極的に作業を手伝い，女性や子どもたちも炊き出しなどの手伝いに参加しました。集落みんなの長年の思いや願いが力となって，全員で作り上げたシマの象徴が完成したのです。

この防波壁の完成によって，それまで青久に押し寄せていた高潮の大部分が防げるようになりました。また，台風にも耐えられる強さも持っていました。そして，何より今まで集落内でなかなかできなかった野菜などの作物も安心して収穫することができるようになりました。そのため，９月の旧暦の十五夜に行われていた「豊年祭」も，心から農作物の収穫を祝う行事となりました。

その後，台風や地震などにより，この防波壁は大きく壊れ，復旧されていない部分もありました。しかし，平成２４年３月には，「奄美市紡ぐきょらの郷（さと）づくり事業」として修復が行われました。その時に，この石垣に関する由来の石碑も建てられました。

厳しい自然環境と生活・交通の不便さなどから，多くの人が青久を離れてしまいましたが，防波壁作りに携わった人々にとって，この防波壁は「故郷で心を一つにして生きた財産」として，いつまでも心に残っていることでしょう。

今回紹介した「シマンチュの力と汗で築いた文化財　青久の石垣防波壁」は，『郷土の先人に学ぶ　第５集』に収められています。この項の執筆者，森山重敏（もりやましげとし）さんは，「この防波壁の価値は，資金やその他の面で国などの力を借りながらも，全体で百人にも充たないシマンチュの力を結集して，自分たちの生活を守るために完成したところにある。（中略）立派に姿を残す防波壁の玉石一つ一つに郷土の先人の力が込められている。」と述べています。

自分たちの集落のために，時間や労力を惜しむこともなく，みんなが手を取り合って，自分たちの力で防波壁を完成させた偉大なる先人に尊敬するばかりです。奄美の先人の思いを知るために，青久を一度訪ねてみてはいかがでしょう。

以上，鹿児島県立奄美図書館でした。